

口絵解説

1、「秋草図屏風」(跡見学園蔵)

六曲一隻。絹本金地彩色。

縦百七十二cm×横六十四cm×六。

制作年、「明治三十八年盛夏月」

署名、「花蹊跡見瀧写」

印記、跡見(朱文方印、陰刻) 華(朱文方印、陽刻)
多喜 蹊

両印ともに、岡村梅軒刻(「花蹊印譜」による)。

本図は、『花の下みち』(大正八年、実業之日本社)に跡見泰氏蔵として、『花のしづく』(昭和三年)には、跡見家蔵として掲出されている。伝来は不明。

2、「万山疊翠図」(跡見学園蔵)

掛幅一軸。絹本墨画、淡彩。

縦百七十cm×横五十七cm。

制作年、「庚午桂月」(明治三年八月)

箱書、蓋表「萬山疊翠図 花蹊女史筆」

蓋裏「大正五年丙辰桂花月 予此画四十七年前之作

今觀之周筆円塾(熟)亦覺有一奇也 喜嫗花蹊題 華(朱文円印、陽刻)

内蓋表「萬山疊翠之図」

内蓋裏「西成跡見瀧写 跡見(朱文方印、陰刻) 西(朱文方印、陽刻)

瀧印 成

(菴箱付き。内蓋は元箱の蓋を改装したもの。箱書きは、いずれも花蹊自筆)

署名、「西成女史」

印記、跡見(朱文方印、陰刻) 西(朱文方印、陽刻)
瀧印 成

遊印 鳳有(朱文方印、陽刻)

高梧 有
松鶴

*第二卷口絵解説4「四愛図」参照。

落款に「恂董北苑万山疊翠図」とあるように、董北苑(董源、五代・宋初の山水画家)の画に倣ったとする。

『花の下みち』に、本図は「日比野雷風氏蔵」となっている。花蹊がこの箱書きをした翌大正六年二月二十八日、日比野雷風（神刀流居合師、剣舞も能くする）がこの掛幅を入手したことが日記に記されている。

来客、日比野雷風来りて面会ス。云、天下の一品、昨日手ニ入候、御覧ニ入度と申。軸もの万山疊嶂之図、予はたち代、西成之時代かきたる者、三百円ト云、是も人の手に渡してはとて、直ニ二百五拾円ニテ買入、昨夜ハ寐られぬほど嬉しかりしと申候。

花蹊は、明治三年三月から四月にかけても「万山疊翠図」を認めている。

3、「松鶴不老図題詩」（跡見学園女子大学図書館蔵）

掛幅一軸。紙本墨書。

縦百三十九・三cm×横六十二・四cm。

制作年、明治後期

箱書、ナシ。

署名、「花蹊跡見氏」

印記、跡見（朱文方印、陰刻）
瀧印 華蹊（朱文方印、陽刻）
書畫

関防印、「香雪」（朱文方印、陽刻）

「香雪」は梅の花の形容に用いられることが多い。大坂生まれの花蹊は、「この花」の号も用いており、梅も花蹊の好んだ花である。なお、此印は花岳（浅田幸子）に譲られている。

書は以下の通り。

一幅祥雲筆下濃 亭々

鉄幹傲三冬 祝君遐算

幾千歳 仙鶴来栖不老

松 題松鶴不老図二首之一 花蹊跡見氏

一幅 祥雲 筆下濃

亭々 鉄幹 傲三冬

祝君 遐算 幾千歳

仙鶴 来栖 不老 松

題^ス 松鶴不老^ニ 二首之一。花蹊 跡見氏。

本七言絶句は、広島県深安郡八尋村葛原老竜（童謡作家葛原★（ききと十幽）の父）の還暦祝として、明治四十二年八月十八日に「松鶴不老之図」とともに制作されたもの（『揮毫雜記』による）。『花の下みち』（大正八年）には、「題自画松鶴」と題され、第三句が「欽他遐算幾千歳」として収載、また『跡見花蹊女史伝』（昭和七年、東京出版社）には、「題松鶴図」として、本掛幅と同じ形で収められている。
平成十五年十月購入。伝来不明。

4、「跡見花蹊写真」（跡見学園女子大学花蹊記念資料館蔵）

ゼラチンシルバー・プリント。白色空押し台紙へ貼附。

縦十四cm×横九・六cm（写真面）

撮影年、大正期

撮影者、「日比谷公園前 大武丈夫」